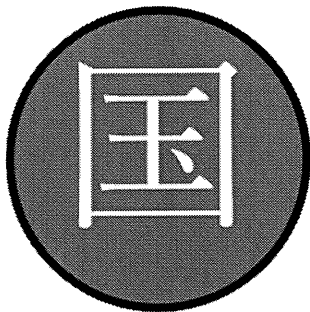




受験 番号					
氏名					

二〇二五年度 二月二日 入学試験 国語問題

国語の注意 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

答えは解答らんからはみ出さないように書きなさい。

字数の指定がある場合は、句読点や記号なども一字に数えなさい。

【試験についての注意事項】

- 1 机の上に出してよいものは、次の三つです。それ以外のものはカバンにしまってください。
 - ① 受験票（机の左上におきます）
 - ② えんぴつ数本（シャープペンシルも可・色ペンやマーカー、定規は使用不可、ことわざ等記載のあるものは使用不可）
 - ③ 消しゴム
- 2 次のものを持つてきた場合は、カバンにしまってください。また、休けい時間中も使用できません。
 - ① 腕時計・置き時計など（音が鳴らないようにしてください）
 - ② 携帯電話・スマートフォン（電源を切ってください）
 - ③ ウェアラブル端末（Apple Watch など）※許可なく携帯電話・スマートフォンやウェアラブル端末を使用したり、携帯電話が鳴った場合、不正行為とみなす場合があります。
- 3 机の中には、何も入れないでください。
- 4 チャイムが鳴ったら、次のことを完了してから始めてください。
 - 問題用紙 ↓ 受験番号 と 氏名 を記入してください。
 - 解答用紙 ↓ 受験番号と氏名を記入し、席に準備されているシールを貼ってください。
- 5 問題についての質問は、いっさいできません。
- 6 気分が悪くなったら、すぐに申し出てください。
- 7 物を落としたら、自分でひろわず、手をあげてください。

次の文章は、灰谷健次郎『太陽の子』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

※ 設問の都合により、本文には一部省略や改変があります。

また、本文をⅠ～Ⅳに区切つてあります。

戦後三十年の神戸の下町に、小学六年の女の子ふうちゃんは、沖縄出身の両親と三人で暮らしていた。両親が営む沖縄料理の店[※]でだのふあ・おきなわ亭には夜になると沖縄出身の人たちが集まり、お酒を飲みながら夜おそくまでおしゃべりをしている。その中にはふうちゃんの口げんか仲間の青年ギツチョンチョンや、かつて三絃^{サンシン}（三味線^{しません}）の名人だったが戦争で片腕^{かたうで}を失ったろくさんがいた。元気で明るく沖縄の話をたくさんしてくれたおとうさんは現在、心を病んでおり、発作^{はっさく}を起こしたときに「ふうちゃんが殺されるやろが……」とつぶやいて、ふうちゃんとおかあさんは心配しているのだった。

※「だのふあ」は沖縄のことばで「太陽の子」という意味

I

家に帰るなり、ふうちゃんは大声をあげた。

「おとうさん。すごいよう」

ふうちゃんは、今までのしんぼうを一気にぶちまけるように、息せき切つてしゃべった。

「おとうさん、びっくりしたらあかんよ。これ、なにやと思う。すごいよ、すごいよ」

おかあさんはあきれて、まるで爆撃^{ばくげき}みたいな子やなアといった。

「ほら、ほら、ほら」

ふうちゃんはダンボールを開けて、中のものを、つぎつぎ出していった。

「ほら、ほら、ほら。これ、ソテツの実のおサル。おとうさん、よういうてたやろ。ソテツの実をナイフで刻んで、動物の顔をかくつて。これ、ほら、アダンの

葉のラッパ。ほんとに鳴るんやで、おとうさん」

ふうちゃんは十センチくらいのアダンの葉のラッパを、口に当てて吹いた。少し間の抜けたユーモラスな音がした。

「な、おとうさん」

ふうちゃんは得意満面だった。

「あれあれまあ、ようこんなものを……」

おかあさんの方が先におどろいた。

「まだまだあるんやで。おとうさん。びっくりしたらあかんよ」

ワラミゴの鶴^{つる}と亀^{かめ}、アダンの葉で作った魚、指を入れて引つぱるととれなくなる蛇^{へび}、星コロ、ソテツの葉の馬と、ふうちゃんはつぎつぎ出していった。

「ほら、これアダンの葉でこしらえた風車。風車のことをカジマヤーというんやろ。沖縄では九十七歳^{きい}になったら花の風車を作ってお祝をするって、前におとうさん、教えてくれたよ。ほらほら。五つもこしらえてきたから、おとうさん五百歳まで生きんとあかんよ」

おとうさんがアダンの葉の風車を手にとって見てくれたので、ふうちゃんは、うれしくてしかたがなかった。

「おとうさん、ヤラブの風^{たこ}もあるで。カーブヤーだけど、おしつぽに赤い布切れもつけてあるよ」

たたみの上は、たちまち、ふうちゃんたちのこしらえた玩具^{おもちゃ}でいっぱいになった。それを見て、ふうちゃんは、

「沖縄だらけや」と、上気した顔でいった。

（中略）

ふうちゃんは、元気のないおとうさんにソテツの葉のめがねをつけてあげた。またクバでこしらえた三絃^{さんしん}をろくさんにあげるつもりでいる。ふうちゃんはおとうさんと草花のおもちゃをお店^{みせ}に飾り、みんなをおどろかさうと計画するのだった。

II

その日のお客は、ふうちゃんのかわいい命令で、みんな、ソテツの葉のめがねをつけさせられた。

「こりやまるで沖繩デーや」

と、花房さんがいった。

「なつかしいなア」

ゴロちゃんは①目をしばたいていった。

「沖繩の山と海が引つ越してきたんやがな」

昭吉くんは粋なことをいった。

「うわあ。すごいやんけ。こんなすてきなものだれがお作りあそばしたんや」

ギンちゃんとはぼけていった。

オジさんは、そんなみんなのようすをにこにこしながらがめていた。

おおかたの①ジウレンがあつまつたころ、ふうちゃんは立って、きょうのことを説明した。

「この沖繩の草花遊びは、いちばん最初、梶山先生が教えてくれました。おじいちゃんに作り方をおそわって、わたしとギツチョンチョンとギンちゃんと三人で一週間かかって作りました。おとうさんが飾りつけをしました。ギツチョンチョンとギンちゃんは仲よくなりました。めでたしめでたし」

みんな大笑いして、それから、拍手をした。拍手は長くつづいた。

ギツチョンチョンは照れてしまって、もうええがな、もうええがなを連発していた。

その日は、おとうさんも長い間、店にいた。それがふうちゃんにはうれしかった。

みんなはいつもより多くお酒を飲んだ。三絃が鳴って歌がはいった。みんな楽しそうだった。

よかった、とふうちゃんは思った。

みんなは、ひとつのことをおなじ心でよろこんでいる。それは、どんな時間よ

りもすばらしく豊かだった。

①ふうちゃんは今、自分がだから愛されていることをつよく感じていた。ふうちゃんのこしらえた小さな沖繩は、今ここで大きな大きな沖繩なのであった。

ふうちゃんは、ろくさんにクバの三絃をあげようと思って、目で、ろくさんをさがした。便所にもいったのか、ろくさんは店にいなかった。しばらくまわったが出てこないの、ふうちゃんは、店の裏にいった。ろくさんは時どき飲み過ぎて、店の裏で酔いをさましていることがあったからだ。

やっぱり、ろくさんはいた。声をかけようとして、ふうちゃんはどきとした。

ろくさんは泣いているのだった。手に、ふうちゃんのこしらえたアダンの風車をしつかりにぎりしめ、なにかつぶやいては、すすり泣いているのだった。

ろくさんのつぶやきをきいたふうちゃんは、いっしゅん凍りついた。

そしてとつぜん、ふうちゃんの脳裏に、仁王だちになってイラブーのくん製を引きさいたおとうさんのことばがよみがえった。

ふうちゃんはくらくらめまいがした。

III

つぎの日の朝、ふうちゃんはさりげなくおかあさんにたずねた。

「ミチコさんってだれ？」

「ミチコさん？ さあ」

おかあさんは、ぼかんとした顔をした。

「ろくさんのおじさんに関係のある人か」

ああ、と、おかあさんはいった。

「そのミチコさんやったら、ろくさんの子どもさんのことやろ。赤ちゃんのときに亡くなりはったそうやけど……」

「その赤ちゃん殺されたんか」

ふうちゃんは大きな目で、じっとおかあさんを見ていった。

「なにをいうんやこの子」

おかあさんはどぎまぎして、あわてて目をそらした。

きのうの夜、ろくさんは店の裏で、アダンの風車をにぎりしめて泣いていた。

ろくさんはことし、五十五歳になる。そんな年の人が、ひとにかくれて泣いているだけでも普通でないのに、ろくさんはこわいことまでつぶやいていたのだ。それは、ふうちゃんのおとうさんが発作を起こしたときに口走ったことと、ほとんどおなじだった。

ろくさんの声は小さく、しゃがれていた。

だからふうちゃんのききちが이었다ったかも知れなかったけれど……。

「ろくさんのおじさんは、その赤ちゃんを戦争で亡くしたんか」

「そうや」

やっぱりおかあさんは、顔をそむけていった。

「それやったら、殺されたんやないか」

「そういうたらそやなア」

なぜかおかあさんは、ほっとしたような顔つきになっていった。

「きのう、ろくさんのおじさん、赤ちゃんの名前を呼びながら泣いていたよ」

ふうちゃんは小さな声でいった。

「そうか」

おかあさんはべつにおどろいたふうもなく、ふうちゃんにはそっけないともとれる態度だった。

「おかあさんは冷たいな」

ふうちゃんはむっとして、陰のある声で突っかかるようにいった。

「なにが」

「なにがって、ろくさんのおじさん、かわいそうやと思わへんの。わたし、きのう泣きそうやったよ」

おかあさんはそれに答えずに、

「ろくさんのおじさんを、そつとしといたげ」とだけいった。

「おかあさん」

ふうちゃんは**② 気色ばんで**いった。

「どうして戦争の話になったら、そうして知らん顔をするんや。むかしの沖縄はよかったというて楽しい話は小さなことまでするくせに……」

おかあさんだけやない、みんなそうやと、ふうちゃんは不満気にいった。

「つらい悲しいことがいっぱいあったんやと、みんなはいうけれど、どんなつらいことがあったんか、どんな悲しいことがあったんか、だあれも教えてくれへん」

おかあさんは、だまっていた。

「なんでや。な、おかあさん」

ふうちゃんは、むきになっていた。

「わたしが子どもやからか」

「そらなア、ふうちゃん」

おかあさんは、ぼつんといった。

「だれだつてつらい悲しい話は、一日も早く忘れてしまいたいやろ」

「……………」

「忘れよう忘れようと思ってることを、口に出すのはつらいことや。そうやろ、ふうちゃん」

「……………」

おかあさんは、それ以上なにもいわなかった。

ふうちゃんは不満だった。おかあさんのいうことはわかる。けれど、ふうちゃんの不満は、そのまま残る。

「戦争のとき、おとうさんはいくつだった？」

「さあ、十四、五歳かな」

ふーんといって、ふうちゃんは考えこんだ。

おとうさんとろくさんは十歳ちがいだから、戦争のとき、ろくさんは二十五歳だ。ろくさんには子どもがあつて、おとうさんにはもちろん、そのとき子どもはない。

おとうさんとろくさんは、おなじようなことを口走ったけれど、べつに関係があるわけではないのか。謎なぞのようなものが、ふうちゃんの中にぼつつり宿った。

〈中略〉

その後ふうちゃんは、沖縄のことが知りたくなりギツチョンチョンに沖縄の戦争の写真集を見せてもらう。

IV

「はよ見せて」

「うん」

ギツチョンチョンはしぶしぶ、ふうちゃんの前に本をおいた。

「これなんや、ギツチョンチョン」

折つてあつた最初のページをあけて、ふうちゃんはたずねた。

「艦砲射撃かんぱうしゃげきと空からの爆撃で、穴だらけになつてしもた沖縄の南部や」

「宇宙船から送つてきた月の写真みたいやなア。えらいことになるねんなア」

それは荒涼とした風景だった。そこにある沖縄は、いつも、ふうちゃんがおとうさんやおかあさんからきいていた美しい沖縄ではなく、生命のひとかけらもない淋しい世界だった。すべてを破壊され焼きつくされた沖縄は、ふうちゃんがいうように、月面と変わるところがない。ちがうところといえは無数にいた大小の穴がすべて巨大な弾痕きょだいだんこんだったことだろう。

「逃げるにところがあらへんやないか」

ふうちゃんは②ヒメイのようにいった。

「南部はどこもひらべったいから、かくれるところがない」と、ギツチョンチョンはいった。

ふたりは顔を見あわせた。ギツチョンチョンとふうちゃんの脳裏に恐ろしい情景が浮かんだ。ふうちゃんののどが、こくと動いた。

「三人にひとり、死んでしもた」

ふーん、ふうちゃんは知らぬふりでこたえた。ふうちゃんは、すばやく頭の中で計算をした。

（おとうさんとおかあさんとおじいちゃんとろくさんのおじさんとゴロちゃんがいたとして、わたしとギツチョンチョンが死んでしまうことになるねんナ）

なア、ギツチョンチョン……と、ふうちゃんは問いかけた。

「わたしが死んだら、おとうさんやおかあさんは悲しむやろなア」

あほか、と、ギツチョンチョンはいった。あほなこと（言うんじゃない）いと、ギツチョンチョンはまたいったが、ふうちゃんがなにを考えているのかよくわかるのだった。

「カンパウシヤゲキつてなに？」

ふうちゃんは、話題をかえるつもりでたずねた。

「でつかい船の上から、爆弾ばくだんを雨みたいに降らすことや。これ見てみイ」

ギツチョンチョンは、つぎのページをあけた。

「これ、みんな敵の船？」

そや、と、ギツチョンチョンはいった。

ふうちゃんは大きなため息をひとつついた。

小さきまぎまの艦船かんせんが、すきまもないほどに海をうめているのだった。上陸した戦車が道や田畑を我が物顔に駆けまわり、乱暴にキヤタピラの跡あとをつけていた。

〈中略〉

ふうちゃんはギツチョンチョンから沖縄の戦争では、米軍の圧倒的軍事力によつて沖縄の住民四五万人のうち一六万人が犠牲ぎせいになったことを聞く。そしてむごい写真にふうちゃんは吐はいてしまう。

あつとギツチョンチョンはあわてて、もう見るな、すまんすまんと、おろおろ

して、ふうちゃんの背をなでた。

ギッチョンチョンは、あきらかに自分がまちがったことをしたと感じた。はじめて、自分の中にある押しつけがましさに、はげしく後悔こうかいしたのだった。

ギッチョンチョンはあわてて、ふうちゃんの前においてある本や雑誌をかたづけはじめた。そのとき、

「あかん！」

と、ふうちゃんはつよい調子でいった。

「見る。ちゃんと見る」

汗あせとも涙なみだともつかないものが、ふうちゃんの顔をぬらしていた。

「もうええ。もうええがな」

ギッチョンチョンは泣き出しそうな声でいった。

「ちゃんと見るワ。吐いたりしてごめん」

ふうちゃんはハンカチとティッシュペーパーあとしまつで後始末をして、落ち着いた態度で洗面所に立っていった。蛇口じやぐちをひねって③イキオいよくいよく水を出し、それからざぶざぶ顔を洗った。

その夜、ふうちゃんはいつまでも眠れなかった。あちこち寝ねがえりをうった。

眠みけを誘さそおうと努力するのだが、そうすればよいギッチョンチョンの家で見ただ写真の中のさまざまな場面が浮かんでくるのだった。一枚一枚の写真がどういう場面で、なにを意味しているのか、もちろんギッチョンチョンに説明をもとめた。けれど、今、ふうちゃんの脳裏に浮かんでくるのは、写真の中のことがらではなく、写真の中の人びとの顔だった。

首里しゅりのお墓の中から助け出された子どもがいた。幼い姉妹は、やなぎごうりの中に入られていた。

子どもはいたずらをして叱しかられたような表情をしていた。ひとりほうつ向き、ひとり正面を向いて口をへの字に曲げていた。手にも顔にも血がこびりついて、泣きもしないで、やっぱり、いたずらをして叱しかられたような顔をして

いた。

どんないたずらをしたというのだろう。ふうちゃんは世の中でいちばん不思議な顔を見たような気がした。やなぎごうりの中の幼女は、決してふうちゃんのおかあさんではないのに、なぜか、おかあさんのような気がした。おかあさんの幼いときのような気がした。

問一 線①③のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 線①「目をしばたいて」・②「気色ばんで」の文中のことばの意味

として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 目をしばたいて

ア まぶしくてまばたきして

イ うれしくてまばたきして

ウ 驚おどろいてまばたきして

エ 悲しくてまばたきして

② 気色ばんで

ア 荒だった気持ちを表情に出して

イ 意味ありげな態度を表して

ウ 心の中の思いをそれとなく表して

エ 得意気な様子を表して

問三 Ⅰの場面でのふうちゃんの様子として適切でないものを次の中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア 沖縄のことを思い出させる玩具をたくさん作ることで、おとうさんを元気づけられると得意になっている。

イ 玩具を手にくれたからおとうさんが長生きしてくれると確信してほっとしている。

ウ おとうさんが話してくれた沖縄の草花の玩具を自分で作ったことに喜びを感じて興奮している。

エ 沖繩の玩具を前にして、神戸にいながら沖繩にいるような気分になりうれしくなっている。

問四

——線(1)「ふうちゃんのこしらえた小さな沖繩は、今ここで大きな大きな沖繩なのであった」とありますが、この場面の説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふうちゃんの作ったものは一見ただの玩具だが、それを通してみんなに沖繩を感じ取らせるだけの大きな力をもっている。

イ ふうちゃんが沖繩の草花の玩具を作ってくれたおかげで、沖繩を愛するみんなの心は盛り上がって一つになっている。

ウ ふうちゃんの作った草花の玩具が、みんなに素朴で豊かな沖繩の暮らしを思い起こさせている。

エ ふうちゃんは沖繩の草花の玩具を作ったことで、はじめてみんなから沖繩の子として認められたと感じている。

問五

——線(2)「決してふうちゃんのおかあさんではないのに、なぜか、おかあさんのような気がした。おかあさんの幼いときのよう気がした」とありますが、ここで沖繩の戦争のできごとを見る前と後では、ふうちゃん自身の中でどのような変化がみられますか。説明しなさい。

問六 次は、本文についての生徒と先生の話し合いです。後の1～5にそれぞれ答えなさい。

生徒A Ⅱのおきなわ亭の和やかな場面からの急展開が気になります。

生徒B Ⅲのろくさんの涙とつぶやきにふうちゃんが衝撃を受ける場面ね。

生徒A Ⅲにもあるように、ろくさんの子どもが戦争で亡くなったことを考えると、ろくさんの深い苦しみを感じられるよね。

先生 確かにそうですね。実は作品の後半に、ろくさんが語る場面があります。沖繩出身のキョシ少年が警察と揉めているところに居合わせた場面です。

「あんたたちには、この子のかなしみがわからんのか。沖繩のかなしみがわからんのか」

ろくさんははじめて大声を出した。

「法の前に沖繩もくそもない。みんな平等だ！」 ※ 警察の男のせりふ

「そうか、平等か。ほんとうに平等かね」

そのときはじめてろくさんの眼がぎらりと光った。怒りで手が震えていた。

「この手を見なさい。よく見なさい」

ろくさんは上着をとり、寒いのにシャツまではいた。浅黒い皮膚が出て、その胸には手が一本しかついてなかった。

ろくさんは見えない左手を突き出した。ほとんど根元からその手はなかった。十分な手当が受けられなかったのか傷口がいびつだった。

「手榴弾でふつとばされた」

ろくさんはいくらかたじろいでいる男たちの前でいった。

「敵の手榴弾ではない。わしはただの木工で兵隊ではなかった。沖繩を守りにきてくれていた兵隊がわしたちに死ねといった。名誉のため死ねといって手榴弾をくれた。」

〈中略〉

ろくさんがキョシ少年の苦しみを分けて担おうとしたように、今ここでろくさんの話に耳をふさいだり、眼をそらしては沖繩の子ではない、ギツチョンチョンのいう『てだのふあ』（太陽の子）ではないとふうちゃんはけんめいに耐えた。

「ええか、この手をよく見なさい。見えないこの手をよく見なさい。この手でわしは生まれたばかりの吾が子を殺した。赤ん坊の泣き声が敵にもれたら全滅だ、おまえの子どもを始末しなさい、それがみんなのためだ、国のためだ——わしたちを守りにきた兵隊がいったんだ。沖繩の子どもたちを守りにきた兵隊がそういったんだ。みんな死んで、その兵隊が生き残った。……この手をよく見なさい。この手はもうないのに、この手はいつまでもいつまでもわしを打つ」

生徒一同 ……。

生徒 A そうだったんですね。「この手はいつまでもいつまでもわしを打つ」は、

「ア」 「ことを表しているのですね。」

生徒 C このろくさんの語りに対してふうちゃんは耳をふさいだり、目をそら

したりせず、涙しながらも、耐えて向き合いました。そのようなふう

ちゃんの姿は、Ⅳの「イ」 「というふうちゃんの発言に

も表れています。」

生徒 B ふうちゃんは、「ウ」 「生きていこうとしてい

るのですね。」

生徒 D それこそが、先生が紹介してくれた場面に出てくる、「エ」として

の生き方なんだね。」

1 線★「ほんとうに平等かね」とありますが、どのような現実を受けて

の発言ですか。この後のろくさんのせりふの中から一文を抜き出さない。

2 「ア」にあてはまることを二十字以内で自分で考えて答えなさい。

3 「イ」にあてはまることを抜き出して答えなさい。

4 「ウ」にあてはまることを二十字以内で自分で考えて答えなさい。

5 「エ」にあてはまることを五字で抜き出して答えなさい。

二 次の文章は、市川浩『（身）の構造——身体論を超えて』の一節です。

これを読んで、後の問いに答えなさい。

※ 設問の都合により、本文には一部改変、省略があります。

また、本文をⅠ・Ⅱに区切ってあります。

Ⅱの冒頭には省略部分の概要をまとめています。

Ⅰ

われわれが主体的に生きている身体（主体身体）は、決して皮膚の内側に閉じ込められているわけではありません。皮膚の外まで拡がり、世界の事物と入り交っています。

われわれはさまざまな道具を使います。道具を使う場合、われわれのからだは、道具を身のうちに組み込み、道具の中にまで拡がっていきます。たとえばわれわれは靴をはいています。触覚の生理学からいえば、われわれは足の裏で靴の内側を感じているはずで、ところが、じっさい歩いているときはそんな風には感じない。

A

外科医が体のなかをゾンデという金属の棒で探ります。そのとき外科医はゾンデをもっている指先で感じているはずで、ところが①ジュークレンしてみると、だんだん感覚がゾンデの先まで伸びてゆくといいます。そしてゾンデの先端で感じることができるようになる。そうならなければ、ゾンデを使いこなすことはできません。恐らく盲人の杖の場合でもそうでしょう。最初は手元で感じていても、だんだん杖の先で感じられるようになる。そういうふうからだが拡大する。

これは物とのかかわりで拡大する身体ですが、われわれは社会的存在ですから、もう一つ他者とのかかわりで拡大する身体があります。東京に住んでいると、

②

カミツ都市ですから、人とかからだが触れあうことをあまり気にしなくなりますが、それを好んでいるわけではありません。電車がすいているときはぼつんぼつんと離れて座っています。東京の喫茶店はこんでいますから、よく相席をたのまれます。

す。皆さんは紳士淑女ですから、「相席よろしいですか」とウェイトレスにいわれ
ると、「ああ、どうぞどうぞ」といいますが、本当は結構だとは決して思っていない
(笑)。むしろ不都合だと思っている。(1) 相席になると落ちつかないんですね。

四つ座席があつて、たとえばこつちが左側に座っているとしますと、相手の人
は斜め右の席に座る。正面には絶対に座らない。また横にも座らない。つまり、
こつちは私空間、そつちはあなた空間というわけで、ちゃんと分けるのです。た
だ二人席のときは非常に具合が悪い。互いに斜めに身を構えて、視線を外し、身
の拡がりが交叉しないよう私空間をつくるわけです。そして目が合いそうになる
とパツと行きすぎて身の拡がりの衝突をさける(笑)。

さらにまたテーブルの真ん中にも国境線が引かれるという面白い観察をした人
があります。私のコップはこつち側にある。相手のコップは向こう側にある。テ
ーブルの真ん中で縄張りが分かれ、そこまでは私空間である。国境線にはどちら
にも属さないノーマンズ・ランド(無人地帯)があります。灰皿やシュガー・ポ
ットはそこに置かれる。たまたま灰皿が相手の領域内にあると、一言断つて、灰
皿を中立地帯までもどしてから灰を落します。相手の領域内にある灰皿まで手を
のばして灰を落したらイヨウですね(笑)。相手も不快を感じずでしょう。その場
合の不快というのは、私もお金を払うのだから、机の半分までは私の領域だとい
う功利的判断ではない。もっと直接的な、からだにさわられたり、からだの一部
を侵された不快感に近いのではないのでしょうか。そこまで身が拡がっているから
です。

II

〈本文省略〉

対象として見たり触ったりできる身体のことを「対象身体」という。赤んぼ
うはじめ、自分に見えている手(「対象として見えている手」)が自分の手
(「主体として感じている手」)であると気づいていないが、手遊びを通して

「対象として見えている手」と「主体として感じている手」が同じであると気
づく(このことを「身が身に折りかえす身の二重化」という)。これがもっと
も原初的な自意識の芽生えである。

からだ以外のものを手のように自由に動かせないのは、何という不条理でしょ
う。これは意のままにならない(他)の発見です。魔術や技術は、世界のすべて
を自分のからだのように自在にシヨリしようとする願望であり、工夫だといえる
でしょう。

この(他)の発見が(自己)の発見のはじまりです。身が身に折りかえす身の
二重化だけでは、まだそれは自己の把握とはいえません。さきにのべたように、
自己の把握は、自分に対する自己と同時に、他者に対する自己がとらえられたと
きに、初めて確立します。自己把握と他者把握はほとんど同時的な出来事であつ
て、この二つは分けることができません。他者を把握することによって自己を把
握する。また、自己を把握することによって他者を把握する。そしてその自己を
自己自身がとらえる(反省)という二重の関係をとおして自己が形成され、自覚
されてゆきます。

〈中略〉

そのような他者との関係においてある私の身体(対他身体)というものがあり
ます。そして他人から見られた身体、他人によってとらえられた自分の存在の把
握があります。(2) 人見知りや照れや恥ずかしさは他人に見られているわが身(自分)
について照れたり、恥ずかしがつているのであり、そこに他者の把握があるのは
あきらかでしょう。恥ずかしさは次第に抽象的な自己を恥じるレヴェルにまで
達するとしても、まず自分が見える(見られる)ものであるからこそ恥ずかしい
のです。もし私が見えないものであったとすれば、人にたいする恥ずかしさは生
まれなかったでしょう。それは反省が抽象的な自己にたいする反省のレヴェルに
までいたるとしても、まず見える自己にたいする身の折り返しからはじまるのと

同じです。こうして子供が恥ずかしいと感ずるようになったということは、他者をとらえるようになったと同時に、自己を把握するようになったということでもあるわけです。

〈中略〉

しかし他者に見られている私は、奇妙な存在です。それは確かに私でありながら、私の自由になりません。他人が私をどう見ているかは私にはわからない。見られている私はある意味では他者の自由にゆだねられ、いわば他者に所有（他有化）されています。〈他有化〉をあらわすヨーロッパ語は〈疎外〉とも訳されます。他人に見られている私は、私でありながら私自身から疎外され、私の自由にならないものになっている。それどころか逆に私自身を支配しさえする。

私が他人から貼られるレッテルにいら立ち、世評を気にするのはこのためです。酔っぱらうと、「お前は本当のところ、俺をどう思っているのだ」としつこく迫る人があります。これは他有化された自己を必死で取りもどそうとしているのでしょう。恥ずかしさにとまなうある種の屈辱感、自己が他有化され、疎外されることから来るのでしょう。何もおかしいことをしていないのに、見られるだけで恥ずかしいのはそのためです。

このように私自身の身体の把握のなかにも、すでに他者に対する私の身体の把握という他者性の契機が含まれています。主体としての身体、対象として（しかし二重感覚とともに）とらえられる身体、さらに他者によってとらえられる身体、これらが分かちがたく統合されているのが、私の具体的な身体です。

問一 線①～④のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 A に入る具体例として最も適切なものを次の中

から選び、記号で答えなさい。

ア 土ぼこりで、靴下が汚れる。

イ 靴ずれで、かかとが痛くなる。

問三

ウ 靴の裏で、地面のどこぼこを感じる。
エ 石につまずいて、足をひねって痛める。

問四

——線(1)「相席になると落ち着かない」とありますが、なぜ落ち着かないのですか。文章Ⅰの中のことを使って五十文字以内で説明しなさい。
次の表は、本文中の「主体身体」「対象身体」「対他身体」について、文章全体をふまえてまとめたものです。表の〈A〉～〈G〉には、
あ 自己・い 他者 のどちらかが入ります。それぞれ、あまたはい で答えなさい。

成長段階 ↓	主体身体	〈A〉が主体的に 生きている身体	
	対象身体	〈B〉でありながら 対象として見たり 触ったりできる身体	見えている身体が 〈C〉のものである という気づき
	対他身体	〈D〉との関係の 中にある 〈E〉の身体	↓ 〈F〉を把握する ことによる 〈G〉の発見

問五 —線②「人見知りや照れや恥ずかしさ」とありますが、これらはある成長段階の過程で感じるようになる気持ちです。同じ段階で起こる感情や思いとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小さい頃はお花が好きだからお花屋さんになりたいと思っていたが、成長するにつれて小さな子どもを助けるお医者さんになりたいと思うようになった。

イ 自分の好きなお菓子ばかりを食べ、夕飯を残してしまったため、親に怒られてしまった。

ウ 友人に「あなたはやさしい人だね」と言われてから、自分でも意識するようになり、本当にやさしい人であるかのような心持ちになった。

エ 「疲れていない？ 大丈夫？」と聞かれ、はじめて自分が疲れていることに気がついた。

問六 次の会話文は、本文を読んで生徒がそれぞれ意見を出し合ったものです。後の1～4にそれぞれ答えなさい。なお、同じ記号の空らんには同じことばが入ります。

生徒A この文章では、自己を把握するためには「ア」「イ」が書かれていたね。たとえば自己紹介をするとき、どここの学校に通っているかとか、家族構成とかを説明するけれど、そのどれもが自分一人ではなく「ア」「イ」がわかるよ。また、本文を読んで、私は友達と話しているとき、自分とは全く違う考えを持っていることにおどろいたことを思い出したよ。

生徒B 友達との違いを知ること、自分のことをより深く知ることが出来るね。また、私は周りの友達からどのように見られているか、不安になることがあるよ。本文を読んで、そのような不安を感じるの、友達が私をど

のように見ているか、本当のことは私にはわからないし、

「イ」「イ」からだとわかった。

生徒C Bさんの「不安」は、他者から見られることで自己が「ウ」「ウ」されることによるものだね。「ウ」「ウ」はとても窮屈なように感じられるけれど、「イ」「エ」「イ」自己を積極的に引き受けることで自由を得ることができるとも考えられるのではないかな。

たとえば誰かに「小学生らしくない」と言われ、「小学生」としての振る舞いを強制されるとき、私たちは自由を制限されているように感じる。でも、「小学生」という「イ」「エ」「イ」自己を引き受けた上で、「小学生らしくない」ということばに従うか否か、自分で選択をすることが大事なんじゃないかな。社会で生きている以上、他者の視線から逃れることはできないから、「イ」「エ」「イ」自己を引き受けたうえで、どのように生きるか選択することが本当の自由につながるのだと思う。

だと思ふ。

1 「ア」にあてはまることばを自分で考えて答えなさい。

2 「イ」にあてはまることばを本文から抜き出して答えなさい。

3 「ウ」にあてはまることばを本文から抜き出して答えなさい。

4 「エ」にあてはまることばを本文から九字で抜き出して答えなさい。

二〇二五年度 国語解答用紙

試験会場の机の上にある
シールを1枚ここに貼ります

受 験 番 号				

氏名

2025K-②

問五	①	問一	—
	②		
	③		
	い		
	④		
	問二	①	
	問三		
	問四		
	問二	②	
	問一	③	

問六	1				
	2				
	3				
	4				
	5				
	問四	A			
	問五	B			
	問六	C			
	問七	D			
	問八	E			

問三	①				
	②				
	③				
	④				
	問一	①			
	問二	②			
	問三	③			
	問四	④			
	問五	⑤			
	問六	⑥			

問四	A				
	B				
	C				
	D				
	E				
	F				
	G				
	問一	①			
	問二	②			
	問三	③			